【ポスター発表】

放課後等デイサービスの支援者・保護者を対象とする量的調査（1）

－支援者の満足度、支援のニーズ、自己評価の分析・検討－

○　新見公立大学健康科学部地域福祉学科　　氏名　泉　宗孝（会員番号 005363）

八重樫　牧子（福山市立大学・会員番号:001335）

〔キーワード〕：放課後等デイサービス、満足度、自己評価

１．研 究 目 的

放課後等デイサービス（以下、放デイ）は2012（平成22）年4月にサービスが開始され、2015（平成27）年4月にはサービスの質の向上のために「放課後等デイサービスガイドライン」が示された。2023（令和5）年4月には、こども家庭庁が発足し、障害児支援は、こども施策全体の中で取り組まれることとなった。同年12月には「こども大綱」などが閣議決定され、これらの内容を踏まえ、2024（令和6）年7月には「放課後等デイサービスガイドライン」の全面改定が行われ、放デイは大きな転換期を迎えている。本研究では、放デイの支援者を対象に、放デイへの満足度・支援のニーズ・自己評価について検討を行うことによって、今後の放デイの役割・機能、必要な実践について検討を行うことを目的とする。

２．研究の視点および方法

放デイを利用する保護者および支援者へのインタビュー調査結果から、質問内容を作成し、放デイを利用する支援者を対象に質問紙調査を実施した。本発表では、支援者の満足度に着目し､①属性と満足度の関連性､②満足度と自己評価の関連性について分析を行う。なお、③ニーズと自己評価の関連性についても検討をしておく。 (1)調査対象：A 県における 26 か所の放デイ事業所の支援者（有効回答数 99 名)。(2)調査期間・調査方法：2024（令和 6）年 6 月～11 月に、無記名式の質問紙調査を実施した。回答は Google Form を用いてオンラインで収集した。(3)調査内容：①支援者の属性：性別、年齢、勤務経験年数、雇用形態、取得資格など、②勤務する放デイのサービス提供に関する満足度、③支援内容のニーズに関する 40 項目、④支援の現状についての自己評価に関する 40 項目。(4)分析方法：各質問項目の基礎集計を行った。従属変数である満足度・ニーズ・自己評価についてシャピロ・ウイルク検定を行った結果、いずれも正規分布をしていなかった。そこで、①支援者の属性と満足度・ニーズ・自己評価との関連性を検討するためは、Mann-Whitney 検定や Kruskal-Wallis の検定を行った。②ニーズと自己評価の関連性を検討するためには、ウィルコクスンの符号付き順位和検定を行った。③利用者評価と満足度の関連性を見るために、利用者評価を 4 つのカテゴリー（①運営・環境、②子どもへの支援、③保護者支援、④地域連携）に分け、Spearman の相関係数を算出し、さらに満足度を従属変数、利用者評価を独立変数とする重回帰分析を行った。分析には IBM SPSS Statistics v29 を使用した。

３．倫理的配慮

質問紙調査に、調査協力有無の質問項目を設け、協力すると回答した人を本調査に同意を得たものとした。調査は無記名式で実施し、結果の集計はすべて統計的に処理し、個人が特定されることのないよう個人情報の保護を遵守した。本発表に関連して、開示すべきCOIはない。本研究は、新見公立大学研究倫理審委員会の承認を得ている（承認番号304）

４．研 究 結 果

（1）支援者の属性と満足度の関連性：性別【男：14名・女：84名】、年齢区分【20代：22名、30代：22名、40代：27名、50代以上：21名】、勤務年数【1年未満：17名、1年以上3年未満：21名、3年以上：61名】、雇用形態【常勤勤務：77名、非常勤勤務（パートやアルバイトを含む）：22名】、には有意差が認められなかった。一方、職場の立場【管理者・児童発達管理責任者：76名、支援スタッフ（現場の職員）：23名】には有意差が認められ、管理者・児童発達管理責任者のほうが、支援スタッフ（現場の職員）よりも満足度が高かった（p=0.049）。（2）支援者の自己評価と満足度の関連性：満足度を従属変数、自己評価を独立変数とした重回帰分析を行った結果、②子どもへの支援カテゴリーでは、「発達や成長に合わせた支援」（t＝3.286、p=0.002）、「友だちとのかかわりに関する支援」（t＝2.438、p=0.018）、「食事・着脱等への支援」（t＝2.137、p=0.037）の評価は満足度に正の影響を与えていた（調整済みR2乗＝0.433）。一方、「スケジュール・ワークシステム利用等への支援」（t＝－2.273、p=0.027）、「感覚を活用した認知機能の発達を促す支援」（t＝－2.626、p=0.011）の評価は満足度に負の影響を与えていた。なお、①運営・環境カテゴリー（調整済みR2乗＝0.099）、③保護者支援カテゴリー（調整済みR2乗＝0.123）、④地域連携カテゴリー（調整済み R2 乗＝0.032）は、モデルとして適合していなかった。（3）ニーズと自己評価の関連性：多くの支援項目（40項目中38項目）に有意差が認められ、ニーズが自己評価を上回っていた。有意差が見られなかった項目は、「学校の学習（宿題等）への支援」、「学校から事業所、事業所から自宅までの送迎支援」のみであった。

５．考 察

（1）属性と満足度の関連性：支援スタッフ（現場の職員）は、子どもに直接関わる業務が中心であり、支援方針などの裁量権が少ないため、支援の難しさを感じることが多く、満足度が低くなったのではないかと考える。（2）自己評価と満足度の関連性：満足度に有意な正の影響を与えている3項目は、個別ニーズへの対応と社会性の育成、子どもの日常生活支援といった直接的な支援が満足度に影響することを示している。一方で、負の有意な影響を与えている2項目は、支援の提供や提供方法であり、支援者が負担や課題を感じているのではないかと考える。（3）ニーズと自己評価の関連性：学習支援に有意差がなかったのは、学習支援（主に学校の宿題）は行っているが、放デイの主な支援内容ではないため、ニーズ、自己評価ともに低いからではないかと考える。送迎支援に有意差がなかったのは、送迎支援はニーズも自己評価も高いことから、放デイでは日常的な支援となっていると思われる。